



至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長

荒谷 卓

明治神宮武道場至誠館には、国際至誠館武道協会（ISBA）に所属する海外の加盟道場から、多くの外国人の武道家たちが、武道を通じた精神文化研修にやってくる。

その研修の一環として、古くから関東の霊山として信仰されてきた東京都青梅市にある御岳山の修行禊の滝で「禊行」を経験させている。

今回は、なぜ武道の修行として禊を行うのか、武道と禊の関係やその意義について解説したい。

武道の根本にある
神道の復元の原理

日本武道の究極的な目的の一つは、相対する者同士が、お互いの戦意を沈め、共生の道を探る事である。もちろん武術では相手を倒し、殺傷することのできる技術を習得するが、その目的は相手を殺傷し排除することではなく、敵対行為を無力化し、敵対した者さえ包容同化して共生の道を示すことである。

こうした考えの前提には、「そもそも世界や宇宙は一体として生成したのだから、対立状態は不自然なものであり、対立のない状態に戻り、共に助け合いながら生きることこそ自然本来の姿である」という神道の考えが存在する。

だからこそ「戦い」という究極の対立状態の中でさえも、相手と共存共栄する関係に復帰することができる、という考えに基づいている。

仲の良い夫婦や親子であつても互いに礼をして稽古を始め、お互いの成長を図りながら、最後も皆一緒に拝礼をして終わる。この作法は、一般的には「礼を大事にする」とか「油断のない様に」と説明されているが、その礼の本質的な意味とは「対立的な心境を抑制」し、自己本位の精神を道場に持ち込まないようにすることである。

しかし、実際には、敵意のある相手や殺意を持った敵対者と相対した時に、そのような心境になり得るかという、非常に難しいのが現実である。人対人の関係では「相手を潰す」「相手に打ち勝つ」という敵対的な気持ちが生え、衝突することになるからだ。

ところが、山や海などの大自然を相手にした場合はどうだろうか。大自然の圧倒的な力の前に、人間が自然に打ち勝とうなどという意識は遠のき、人は素直になる。

厳しい山中や荒れた海、冷たい滝などのもの凄いエネルギー

喧嘩をするように、本来は和して一体である相手と一時的に対立状態になることは不思議なことではない。そうした状態を本来の「和する」状態に戻せばよい訳であり、「敵対者とも元々は一体である」と捉えるのだ。

周囲から孤立した状態や自ら分離・独立して自己本位になつたような状態を、神道では「マガツイ（禍津霊）」と呼ぶ。一方、本来の自然状態、つまり全体と一体となり和する状態を「ナオイ（直霊）」という。

神道では、「マガツイは許されない」とか「マガツイたら最後、二度と元には戻れない」とは決して考えない。マガツイはナオイに戻せばよいとする。つまり、マガツイたとしてもナオイに戻すという復元の原理があるからこそ、人も社会も修理固成（つくりかためなし）ながら成長発展していくのだ。

このように神道では、「対立があつてはならない」と否定するのではなく、対立がおきたらの中に身を置き、寒さ、冷たさに耐えるという対立的心境を乗り越えた時に、自然を受け入れ、その中で自分の生きる場所を見出すことを体感、体得することができる。歯が立ちようもない環境の中に自ら身を置くことで、その環境と一体となり、大自然の中の自己の居場所を得る心境に達するのである。

これは人工的には作り得ない貴重な修養の場であり、これこそ自然の中で禊をすることの意味である。

そしてこの心境は、武道で言う「一騎当千」の精神に結び付くものでもある。戦いにおいて、一対一なら、当然勝敗にこだわ

る。二人や三人ぐらゐまでなら戦技と戦術を工夫して勝利を目指す。ところが、百人の相手に対した時には、武術の技をどう使うかという技術論や戦術論で対応するのは不可能である。こうした場合、精神的な側面から多数の相手一人ひとりの心に影響を与えることを考えざるを得

和する方向へ導くという発想をする。

同じように和魂（にぎみたま）と荒魂（あらみたま）という考えがある。和する性質と荒ぶる性質が一体であるという考えだ。これは、自然に置き換えればよく分かる。包み込むように心を慰めてくれる優しく豊かな自然と、総てを瞬く間に破壊する荒々しい自然は一体のものである。人間の願望だけで、片方を否定することは、極めて不自然で勝手なことである。

平和を享受することのみ正しいとし、紛争を否定したところで空虚である。紛争状態を平和な状態へと導くことを真剣に考え力を尽くすことこそが必要なのだ。

そして武道とは、この対立から和へ向ける運動を主体的・意識的に働かせる矯正作用であり、他者を敗北させ撲滅するところに平和はなく、勝者が敗者を、強者が弱者を救済するところにこそ真の平和があることを悟る

ない。そして、それ以前に、勝敗と無関係に、百人千人の敵であろうと我行かんという気概・気力が必要となる。

この気概と気力を鍛練できるのは、大自然を相手にしなくては修養できない。大自然のエネルギーを受け入れ、自然と一体となる体験をすれば、「人間千人に対する」ことが特殊なものではなくなる。一騎当千の気概とはここから生まれてくる。

自然の一員としての壮大なる自由を得よ

禊という行を通じて自然全体の中の自己を知ることができれば、近代西欧思想が言うところの理性の本質が理解される。我々人類は、人間の「存在」と「理性」を過信し過ちを犯してきた。

その第一は、自然（神）と一体の人間の自性（直霊）を、自我意識の狭隘なる空間に閉じ込

道である。

大自然を受け容れ「一騎当千」の心境を醸成する禊

しかし人間同士が向き合う場合、どうしても「相手に勝利したい」「相手に打ち勝とう」「あいつには勝てる」という期待感や強制排除の誘惑が働いてしまう。特にリング上や武道場という閉鎖的な空間で一対一で向き合えば、そのような心境になる方が自然でさえある。

武道は「礼に始まり礼に終わる」と言われるが、それは「本来の目的が戦いではなく、和して共生する」ということを、形に顕したものだと言える。

普段の稽古においては、利己的で対立的な心境に陥ることを避けるため、道場稽古の作法として、全員で神棚に向かって気持ちを一つにして礼をする。経験を積んだ上級者であろうと始めたばかりの初心者であろうと皆、神棚に拝礼をしてから、お

め、孤立した物質的「存在」として人間を蔑んできた。

その第二は、自然（神）と共生する壮大なる人間の「自由」を奪い、理論と法秩序の奴隷状態に貶めてきた。

その第三は、自然（神）の生成による公共の恵みを、人間個人が所有できるとかん違いし、他者と、社会と、自然の成長発展を妨げてきた。

これらは総て、自然（神）に対する罪である。

人間はその団体生活を離れて、個人主義に走り、自由主義に赴くことが邪悪の出発点である。団体生活の分裂解体が人生悪、社会悪の根源である。氏神様を中心とした伝統的村落や家族的社会、本家や親族家族といった共同体を解体したことが、現在の孤独老人、年金・介護問題、就職難問題、いじめ、格差などの根本起源であろう。したがって、我々は、あらためて共同体を構築することから始めなくてはならない。

我々は、宇宙の中に生きており、我々もまた宇宙を構成する分子に外ならない。従って我々は宇宙と一体に成ることができないのである。宇宙の外から第三者的に宇宙を分析し抽象して得た概念はいかに理論的に整備されたとしても、生きている宇

宙はそこから出てこない。例えば、日本の武人に成って武道の稽古を体験すれば、日本の武を体得して「知る」こととなる。体得して「知った」ことは、実際に言うことで「体頭」できるわけだ。これこそが真の学びと成長であって、理論的に推論してみたところで日本の武の何た

るかは「行う」ことはおろか「知る」こともできるはずがない。

人間は自然（神）から与えられた理性を、欲求と勘違いし、自然（神）のつくった公共なるものを人間個人が所有できるものだと誤解している。そして、それにより人間、社会、自然の正常なる発展が阻害されている。人間は本来、自然の一部として所定の働きを成すことが期待され、それゆえこの世に生を受けずである。しかし、自然に対する謙虚さを失い、自己の存在を過信して、自らつくった法と理論に縛られている。他者に勝利する、他人と競争する、人より儲けるなどという尺度にとられ、窮屈に生きている。

しかし本来人間は、自然の中の一員として壮大なる自由を有していたはずだ。

褻を通じてそのことを悟れば、本質的な理性に従い、大自然の中で個々の人間に与えられた使

命に向かつて自信を持って進むことができる。

社会や国家の責任ある立場の人は、細かい技術論や目先の利益にとらわれてはならない。

世界の事情を知って、自然の大道を悟るならば、強大なる国家や権力に恐れはばかる必要はない。また、先方の事情も知らずに、悪意ある情報に踊らされ、他国のことや他者のことを蔑視し暴言を吐くことは公道正論とは言えない。

大なる公共心と自然的壮大なる自由心を相手に示すことができれば、自ずと交渉にも迫力が出る。指導者たるもの、大自然と一体となった時の「一騎当千」の心境を持ち、宇宙の一員としての広大なる自由な心と一体的共存共栄の意識を持って事を為さなくてはならない。

どの国に対しても誰に対しても、同じように道理を正すこと。これこそが日本の大見識ではないのか。

